

令和7年8月

景

# あ お ぞ ら

月

第414号

鹿屋市青少年育成センター

鹿屋市共栄町20-1 TEL 31-1138

(鹿屋市教育委員会 生涯学習課)

## 「錦江湾を渡る経験が育む、未来への力」

鹿屋市立下名小学校 校長 早崎 雄一朗

「ああ、今年もこの時期がやってきた」

夏の時期になると思い出す、教諭時代の貴重な経験。鹿児島市のある小学校に勤務していた時の経験話を紹介したい。

その学校には、長年続く錦江湾横断遠泳という行事があった。私も何回か挑戦し、錦江湾を横断・完泳するという貴重な経験をした。まだ気温、水温の低い5月の始めから練習をスタートし、7月終わりの本泳までの約3ヶ月間、子供たちとともに練習に励み本番に臨む。教師は「先生コーチ」と呼ばれるが、子供同様、数多くの検定に合格しなければ本番に挑めない厳しいものである。挑戦できるのは4年生以上、経験回数によって、白・青・オレンジと帽子の色が分けられる。最高3回経験すれば、晴れてオレンジ帽を付け、それぞれの隊のリーダーとして先頭を泳ぐ名誉ある大役を引き受ける。錦江湾の雄大な自然の中、桜島をバックにゴールの磯海岸を目指しひたすら泳ぐ。その姿は圧巻の一言に尽きる。ゴールした子供たちの表情は自信に満ち溢れ、真っ黒に日焼けした凍とした姿を見せる。今振り返ってみると、錦江湾を自らの力で泳ぎ切るといった経験が子供たちの心身を鍛え未来を生き抜くための大切な力を育てていたのではないかということに改めて実感する。以下、整理しながら振り返ってみたい。

まず、困難を乗り越える精神力と自信。目の前に広がるのは広大な海。時に押し寄せる波や風、口に入ればしょっぱい海水である。加えて長距離を泳ぎ切るといった肉体的な疲労も襲いかかる。当然、強い精神力と揺るぎない自信が不可欠となる。プールでの練習を十分積んでようやく海に出られるのだが、海に出れば自然との戦い。仲間を信じ励まし合いながら自身の限界に挑んでいくしかない。最初は不安そうにしていた子供も、練習を重ねるごとに力強い泳ぎを見せるようになっていく。困難や限界を乗り越え完泳できたとき、彼らの表情が達成感と自信に満ち溢れたものになるの

は、この経験から出るものであろう。遠泳が様々な困難に対しても勇気を与え「やればできる」という自己肯定感を育てていることは言うまでもない。

次に、仲間との協調性と共感力。遠泳は集団で隊列を組んで泳ぐ。子供たちは互いのペースを意識し、遅れる仲間がいれば励まし、助け合う。くじけそうになる仲間がいれば、自然と手を差し伸べ、全員でゴールを目指す。多様な個性を持つ子供たちが、一つの目標に向かって協力し合うことの重要性を肌で感じ、他者を思いやる心を育むことができる。社会において、必要不可欠となる人間関係を円滑に進める資質や能力を自然と身に付けていく。

さらに、自然への畏敬と感謝の心。錦江湾、桜島という豊かな自然の中で泳ぐ経験は、子供たちに自然の雄大さや時に厳しさも教えてくれる。透き通った海、潮の香り、そして遠くに見える桜島。時にはイルカと伴泳することもある。これらの体験は、自然への畏敬の念と感謝の心を育てていく。海の安全を確保するために尽力してくださる多くの方々も、子供たちは実感していく。

そして、地域との繋がりや伝統の継承。遠泳は伝統として地域に深く根付いている。地域の方々もこの行事を温かく見守り、時にはサポートして下さる。遠泳に参加することで、地域の一員であるという自覚を高め、地域への愛着を育むことにも繋がる。先輩方が築き上げてきた伝統を受け継ぎ、自分たちがその一翼を担うという経験が子供たちに郷土愛と責任感を育てていくのだろう。

振り返ってみると、この錦江湾横断遠泳の経験は、子供たちにとってまさに青少年健全育成の理想的な実践の場であったと改めて感じている。この貴重な経験が、未来を力強く生き抜くための確かな土台となることを願っている。